

中病棟の病棟移転・開院についての病院長挨拶

京都大学医学部附属病院 病院長

宮 本 享

本年、9月末に新病棟（中病棟、次世代医療・iPS細胞治療研究センター）が完成し、12月22日にすべての病棟の移転を行い、予定通り開院の運びとなりました。

建設中や開院に向けての移転業務に多大なご協力をいただきました各方面の関係者の皆さまならびに周辺の住民の皆さまに厚く御礼申し上げます。

今回完成しました中病棟は、高度急性期医療に対応できる多くのICU病床や周産母子・新生児医療の拠点となるMFICU、NICU、GCUを備えた病棟です。「急を要する脳卒中、心血管病の治療」や高難度救急救命治療、「症状が急変したお母さんや赤ちゃんの治療」をより多く行えるようになります。最新の設備を備え、医師や看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士などのさまざまな医療スタッフが連携して患者さんのケアにあたることで、質の高い療養環境を提供し、患者さんが自らの治療に専念できるだけでなく、患者さんのご家族にも安心していただける施設となっております。今後、超高齢化を迎え、ますます増加していくことが予想される急性期高難度の患者さんを受入れ、治療し、地域社会へ復帰していただくために、新病棟が果たすべき役割は大変大きなものです。

また、次世代医療・iPS細胞治療研究センター（Ki-CONNECT）は4月の開院を予定しております。新しい医療の展開が期待されており、有効で安全な医薬品、治療法をできるだけはやく臨床で応用できるようにしたいと考えています。

当院は現在でも大学病院としてもトップレベルの救急の受け入れを行っておりますが、来年には手術部・救急部を含む中央診療棟の改築が行われ、救急外来の拡張や手術室の機能強化などにより、高難度救急に対する機能がさらにアップします。また、その後も将来を見据えた施設整備を予定しております。

引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。